

モード Mode は語る

中野 香織

賃金はじめ社会課題を解決

大島紬（つむぎ）は約1300年前に奄美大島で誕生した。泥染めを施した渋い艶のある絹織物は、世界でも類を見ないほど個性が強い。

今でも昔ながらの分業体制で作っている。工程は30～40にも分けられ、それぞれの作業が複雑かつ繊細で、熟練した技術を要する。職人の平均年齢は70歳を超え、後継者が全く足りない。

職人養成を目的とし、着物専門店のやまと（東京・渋谷）と一般財団法人きもの森は、地元行政と連携して「本場奄美大島紬技術専門学院」



泥染めや草木染めによるバリエーションが豊かな大島紬

を創設した。2018年のことだ。

織物に興味のある人が技術を身につけ、織子（おりこ）として仕事を

大島紬、次代につなぐ

始めるなど成果が表れている。とはいえ、職人に十分な賃金を払っていないなど、古くから産地に根付く問題は山積したままだ。

これらの社会課題を官民一体で解決すべく、やまとは23年5月に大島紬の中心的産地である龍郷町（たつごうちょう）と「龍郷町・ソーシャル・アクション・パートナー協定（T-SAP協定）」を締結した。

活動内容には、大島紬や龍郷町の歴史と文化をはじめとする魅力の発信が含まれる。PR活動により産業全体の収益性を高めることを目指

し、賃金問題などの解決につなげる。

やまが行政と連携協定を結ぶのは、東京都渋谷区に続いて2度目。こうした官民協定はどのような効果をもたらすのか？

「自治体と民間が不足する部分を補い合える」と矢嶋孝行社長は語る。

「職人の育成だけなら自治体がお金を出せばなんとかなる。でも、センスのいいPRやスマートな流通など、扱う対象に情熱を持つ民間でないとできないこともあります」

社内への影響も大きいという。「社会的な貢献をしているという実感が喜びになります」。産地で働く職人の幸福、都心のビルで働く人の喜びも織り込んで、大島紬は未来に受け継がれていく。